

14:1 すると、全会衆は大声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。

14:2 イスラエルの子らはみな、モーセとアロンに不平を言った。全会衆は彼らに言った。「われわれはエジプトの地で死んでいたらよかった。あるいは、この荒野で死んでいたらよかったのだ。」

14:3 なぜ【主】は、われわれをこの地に導いて来て、剣に倒れるようにされるのか。妻や子どもは、かすめ奪われてしまう。エジプトに帰るほうが、われわれにとって良くはないか。」

14:4 そして互いに言った。「さあ、われわれは、かしらを一人立ててエジプトに帰ろう。」

14:5 そこで、モーセとアロンは、イスラエルの会衆の集会全体の前でひれ伏した。

14:6 すると、その地を偵察して来た者のうち、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブが、自分たちの衣を引き裂き、

14:7 イスラエルの全会衆に向かって次のように言った。「私たちが巡り歩いて偵察した地は、すばらしく、良い地だった。

14:8 もし【主】が私たちが喜んでおられるなら、私たちをあの地に導き入れ、それを私たちに下さる。あの地は乳と蜜が流れる地だ。

14:9 ただ、【主】に背いてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食となる。彼らの守りは、すでに彼らから取り去られている。【主】が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」

14:10 しかし全会衆は、二人を石で打ち殺そ

うと言い出した。すると、【主】の栄光が会見の天幕からすべてのイスラエルの子らに現れた。

会衆は実際に自分たちが見たわけでもないのに、不信仰に陥った偵察たちのことばを信じてしまいました。「泣き明かした。」とありますから、祈るよりもむしろ、不信仰からくる感情に支配されてしまったのです。

そうなると理性的な判断さえもできなくなってしまいます。信仰に生きてきた者が、主に従わなくなると、このようなところに陥ることがありますから注意が必要です。

その結果、エジプトに戻るということが最良であるという妄想にとりつかれてしまいました。本当はエジプトこそが自分たちを死の淵においやった最悪の場であるのに。新約時代の今も、ある人は不信仰から恐れをいだき、滅びに向かっていった頃に戻ろうとしますから、注意が必要です。

モーセはなす術がありませんでしたが、彼のこのへりくだりが、ヨシュアとカレブの確信に満ちた発言を生んだとも思われます。彼らが殺されそうになった点だけをみれば、この発言は逆効果であったようにも思えますが、しかし彼らの信仰を表し、そして主には認めていただきました。

主の前に正しいと確信することは、勇気を持って貫きましょう。たとえみ心を理解できない人々ばかりであっても、最終的には主が栄光を表わしてくださると信じましょう。人生も教会も主のものだからです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

